東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　42：227～241，2016

JLC-TUFS SS プログラムの進展
― 2015 年サマープログラムを中心として ―

宮城徹・寅丸真澄・金子比呂子

【キーワード】　SS プログラム、海外留学支援制度（協定受け入れ）、
異文化体験プログラム、ビジネス日本語、日本人学生との共修

1．はじめに

2011 年度に日本学生支援機構（以下 JASSO と略す）によって開始された留学生交流支援制度「ショートステイ（日本への留学生受け入れ）」「ショートビジット（日本からの留学生派遣）」は、大学等がおこなう 3 か月未満のプログラムに参加する学生を対象とした奨学金プログラムのことである。前年度に大学から申請された受け入れプログラムが JASSO に認められると、参加学生のうち一定の成績基準を満たした者には月額 8 万円の奨学金が受給される。2013 年度からは「海外留学支援制度（協定短期受入、協定短期派遣）」、2015 年度からは「海外留学支援制度（協定受入、協定派遣）」と名称を変えて、現在まで続いている。本稿で扱う SS プログラムとは東京外国語大学留学生日本語教育センター（JLC-TUFS と略す）で実施している日本語・日本文化研修のサマープログラム（3 週間）とウィンタープログラム（4 週間）の総称であり、それぞれ「SSSP」、「SSWP」と呼ばれている [1]。

JLC-TUFS では、2012 年度から SSWP を開始したが、その実践と課題については報告済みである（藤森・宮城・中村・荒川 , 2013）。さらに 2014 年夏にはロシアの協定大学 4 校 11 名 [2] を対象に、SSSP を実施している。本稿では、これらの経験を踏まえ、2015 年 7 月から 8 月にかけて実施した SSSP2015 の実践と課題について報告する。

---

[1] ショートステイ（SS）という呼称は、現在 JASSO では用いられなくなっており、英語表記も Short-term Study in Japan となっている。しかし、本学では 2012 年以降一貫して SS プログラムという名称を用いてきている。

[2] 参加留学生の内訳は、サンクトペテルブルク大学 3 名、ロシア国立人文大学 3 名、モスクワ大学 2 名、極東連邦大学 3 名であった。

2. SS プログラムについて

2. 1 SS プログラム全般の特徴

SS プログラムでは、短期間（SSSP は 3 週間、SSWP は 4 週間）に集中して日本語や日本文化について学ぶ（末尾の「スケジュール表」を参照のこと）。月曜から金曜日の午前中は、日本語の授業があり、午後や週末には文化体験、近隣地域での調査や公共施設の見学がある。この午後や週末には、授業外活動とはなるが、日本人学生らが企画した様々な交流活動（たとえば、鎌倉ツアー、祭り見学など）に参加することも可能である。

この午前中の学習と午後・週末の経験は相乗効果を生むようにシラバスを工夫してある。履修学生は、午後や週末に使いそうな語彙・表現を午前中の授業で学ぶと同時に、教師から午後や週末のタスクを受け取る。そして、それらのタスクで経験したことを教室に持ち帰り、学びを深めるという学習サイクルを体験する。さらにこのプログラムの最後に行われる修了発表会に向けて、プロジェクト活動を実施する。そのプロジェクト活動では、グループごとに興味のあるトピックを選び、それについて午後や週末を使って調査・分析を行う。プログラムの後半には、その調査結果をまとめ、PPT を作成し、発表の練習を行う。この一連の学習活動は独力で行うのではなく、あえて同級生、日本人学生、教員らと行うようにし、刺激し合い、協働して学び合う楽しさを体験できるための仕組みである。

もう一つの特色は、上記の一連の活動の記録として e ポートフォリオを作成させていることである。e ポートフォリオとは学習者がネット上のシステムに自らの学びの過程を記録する（文章、写真、ビデオなど）もので、それをクラスメイトや教師と共有し内省を深めることでさらに学びを深めていくことができる。さらに教員側としては学習者の知識面だけでなく、パフォーマンス面の成長の過程を評価に織り込むことができる。また学習の記録は第三者に学習活動のエビデンスとして示すことができる。これまで Mahara、manaba-folio といった e ポートフォリオのソフトを用いてきたが、今年度は大学全体で導入をし始めた教育学習支援システムの TUFS-Moodle を e ポートフォリオ的に活用することとした。

このプログラムは短期間なので、本来の e ポートフォリオの利点である「長期間の利用で学習者の成長を記録する」ことはできないが、それでも以下の点で利用価値がある。第一に、プログラムが短期集中型であるがゆえに、参加者は大量のインプットを受けても、受け身の学習態度では、学んだことを整理できずにプログラムが終了してしまうが、イベント（例えば午後の活動）ごとに、そこでの

気付きを文章化したり、写真に残したりした上で、それらを基にしてクラスメイトや教員と語ることで、経験の意味付けを行うことができる。第二に、短期間とはいえ、集中的かつ効率的に学んだ過程を振り返ることで、自分の成長を実感することができる。第三に、通常、午後や週末の活動には一部の教員が立ち会うだけだが、他の教員もｅポートフォリオを通して、学生のパフォーマンスを確認したり、それに対してコメントしたりできる。第四に、参加学生の中には、このプログラムに参加したことで派遣元大学での単位互換を認められることがあるが、その際、派遣元大学の教員がJLC-TUFSでどのような授業を受け、学生がどのようなパフォーマンスを示したのかが、このｅポートフォリオを見ることでわかるのである。

2.2 SSSP2015の概要・特徴

サマープログラムは2014年に引き続き、2年目の実施となったが、昨年とは大幅に変わった点がある。まず時期の設定である。本学は今年度から、本学学生の留学送り出しと提携大学学生の受け入れを促すため、これまでの2学期制から4学期制となり、各々の学期の期間は、春学期（4月1日～7月11日）、夏学期（7月12日～9月30日）、秋学期（10月1日～1月23日）、冬学期（1月24日～3月31日）と設定された。そのため、昨年には7月2日（水）～25日（金）で実施されたSSSPは、7月10日（金）～8月4日（火）と設定されることになった。

次に参加学生数と日本語レベルである。多数の本学学生が提携校への留学を果たす「交換」として、本学にも提携大学から多くの留学生を受け入れる場を設定する必要があり、それにSSプログラムが貢献できるだろうということで、昨年はロシアからの11名の学生に対し、ビジネス日本語1クラスの設定でSSSPが開始された。だが今年は、最終的な参加者数は、総合日本語クラスが34名、ビジネス日本語クラスが10名の計44名であった。

SSプログラムの初期には、初日にプレースメントテストや作文などを課し、クラス分けを行っていたが、的確な授業準備のために早めに学生の日本語力を把握しておきたいと考えたため、2004年から筑波大学が開発、実施しているJ-CAT（Japanese Computerized Adaptive Test）を利用することとした。

J-CATについては、事前にテスト期間と自身のIDを参加予定者に知らせ、1時間前後のテストを受けさせるようにした。テストでは、「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能が400点満点で総合的に評価される。テスト結果はプログラム・コー

ディネーターに送られ、その成績をもとにクラス分けが行われた。J-CAT のレベルでいえば、参加予定者のレベルは、「初級（-100）」8 名、「中級前半（100-150）」7 名、「中級（150-200）」8 名、「中級後半（200-250）」12 名、「上級前半（250-300）」6 名、「上級（300-350）」3 名、「日本語母語話者相当（350-400）」0 名、全 44 名であった。但し、この結果を踏まえた本プログラムのクラス分けは、「J1（初級）」11 名、「J2（中級前半）」5 名、「J3（中級後半）」7 名、「J4（上級）」11 名、「ビジネス（上級）」10 名となっている。

3. 授業の概要

本プログラムは、3 週間という短い期間ながらも、日本国内で日本語と日本文化を学び、体験学習をするという短期集中型プログラムである。そのため、実際の場面で役立つ日本語や日本文化などの日本の情報を学ぶ午前中の授業活動と、午後の体験学習とを有機的に結び付けるべくデザインされた濃密なプログラムとなっている。この午前中の「総合日本語」クラスの振り返りを以下にまとめたい。

3. 1 総合日本語

総合日本語の授業の目的は、日本語能力の向上とともに、参加者が日本での文化体験を通じて、日本についての理解を深めることである。そして、この参加をきっかけに、将来的には、より長く、より深く日本や日本語を学ぶプログラム参加をめざしたいとする学習者を増やすことである。

この午前中 2 コマの総合日本語の授業は、全受講希望者 34 名を、先述のように、4 クラスに分けて行った。各レベルのシラバス、大枠の時間割は専任教員が作成したが、各クラスごとの詳細な時間割等はクラスコーディネーターが作成し、それにしたがって、ティームティーチング体制で授業を行った。大枠の時間割表は稿末資料を参照されたい。また、総合日本語授業のシラバスや、授業内容の根幹は大きく変わってはいないため、詳細については藤森等（2013）を参照されたい。

（1）SSSP 2015「総合日本語」学習者、及び各クラス授業についての特記事項

① J1 クラス：学生数 11 名、使用教科書『大学生の日本語』

初級前半をほぼ終えた初級後半のクラスと位置付けてスタートしたが、実際にはひらがなさえおぼつかない学生、中国語以外で話の通じない学生を含め、ゼロ初級に近い学生が 8 名もいた。このため、J1 では、急遽教科書を『中級へ行こう』

から『大学生の日本語』にかえ、ごく初歩の学生を対象とするクラスに作り変えなければならなくなった。ただ、レベルを横断して作られた修了発表会のグループでは、ゼロ初級に近い学生も、その真面目な学習態度で、まわりに助けてもらい、日本人学生の支援と教員の懇切な指導により、優れた成果をあげることができた。本来、対象ではないゼロ初級の学生には補講も行ったことを付記しておく。

② J2 クラス：学生数 5 名 使用教科書『トピックによる日本語総合演習 中級前期』

J2 クラスに配されたものの、レベル変更した J1 クラスに変わった学生、逆に J1 から上がってきた学生、また J1、J2 を出たり入ったりする学生がいたりと、かなり落ち着かない状態が続いた。当初は J1 クラスを初中級、J2 はその次のレベルの中級前半の学生対象のクラスと想定していたが、J1 が急遽初級クラスとなったため、初中級の学生の受け皿として J2 のレベル変更も考えた。だが、わずか 3 週間という時間の制約により、結局初めのまま、中級前半のクラスとして授業を行った。学生数が少ないこともあって、指導を手厚く行うことができ、発話の機会も多くなったため、学生同士も仲良くなり、和やかな良い雰囲気の中で勉学が行えた。クラスの学生は幸運であったが、最も手厚くすべき初級の J1 の人数を考えると、何らかの工夫が必要だったかもしれない。

③ J3 クラス：学生数 7 名 使用教科書『トピックによる日本語総合演習 中級後期』

ここ数年来、常に同じレベルで教えてきたベテランの担当教員がクラスコーディネーターであったこともあり、比較的順調に授業が進んだ。J4 からクラス変更して入ってきた 1 名以外は学生も一定で、最も多様な国・地域の学生が共に学ぶ総合日本語クラスの理想的な学生配分のクラスとなったと言える。

④ J4 クラス：学生数 10 名　使用教科書『トピックによる日本語総合演習 上級』

上級にふさわしく、日本語能力の高い学生がそろった。ただし、その多くが中国の学生であり、数名の中国以外の学生にとってはやや疎外感を感じることになった可能性もある。また、修了発表会の縦割りクラスでは、J1 や J2 の学生を助けることでおおいに貢献してくれたが、自身の求める課題を追及するためには、下のレベルの学生への助力はやや気の重いものとなっていたかもしれない。むろん教えることによって自らも学んだという学生も多かったようで、日本人学生と初級の学生との仲立ちをすることで、日本人学生からも初級レベルの学生からも信頼され、自らの日本語に自信が持てるようになった学生もいる。上級の学生は、日本語で深い話もできるようになり、真の交流ができた学生たちとも言える。

3. 2 ビジネス日本語

本プログラムにおけるビジネス日本語クラスの目的は、実践に役立つ上級ビジネス日本語能力の向上を目指すとともに、日本の企業や企業風土に関する学習者の理解を深めることである。これにより、日本語教育の観点から、日系企業やそれらに関わる自国企業への就職を検討している学習者を支援する。なお、昨年度よりビジネスクラスは開講されているが、今年度より本格的に実施することになった。ビジネスクラスの概要を表1に示す。

表1　ビジネス日本語クラスの概要

項　目	内　容
大学・人数	香港(7名)、上海(3名)
専門	日本語(8名)、経済(1名)、数学(1名)
授業内容・コマ数	教室授業(表現・語彙、ケーススタディ)、体験学習(企業訪問、日帰り研修等)
教科書	『ロールプレイで学ぶビジネス日本語 グローバル企業でのキャリア構築をめざして』(2012)

(1)学習者

学習者は、香港と上海の大学に在籍しており、プログラム開始前のプレースメントテストのレベルは、中級3名、中上級3名、上級3名であった。四技能の総合的な日本語能力の高い学習者がいる一方、会話能力や作文能力、文法力が不十分である学生もおり、クラスの日本語レベルは一定ではなかった。但し、全員真摯に授業や課題に取り組み、プロジェクト活動にも積極的に参加していた。学習者の7割が日系企業またはそれらに関連する自国企業への就職を検討しており、学習意欲が高かったためであると考えられる。一方、自国でビジネス日本語を学習していた学習者は2名のみであり、プログラム開始時において、日本の企業風土や企業そのものについての知識はほとんどなかった。

(2)授業内容

授業は、教科書を使用してビジネス日本語特有の表現や会話を学習する教室学習と、日本の企業や企業風土についての理解を深めるためのプロジェクト活動に区分できる。前者は、主に日本語能力の向上を目指した日本語学習であり、後者は異文化理解能力の育成を目指した日本語学習である。それぞれの学習内容は次の通りである。

①日本語能力の向上を目指した日本語学習

学習者が日本の企業で実際に遭遇する場面ごとに、ビジネス日本語特有の表現についてロールプレイによる会話練習を行った。また、社会文化的背景の違いにより外国人社員が仕事で直面する問題についてケーススタディを行った。教科書に新入社員の自己紹介から会議、営業交渉、クレーム処理に至る場面やそれらの場面で起こりうるケーススタディが取り上げられ（表２参照）、学習者はビジネス日本語の基礎を学ぶとともに、日本の企業風土や商習慣についての理解を深められた。授業は回によって少しずつ異なるものの、場面会話の談話展開や表現、語彙の確認と練習、ロールプレイ課題の取り組み、発表、ケーススタディのための話し合いという流れで進められた。また、この他、ビジネス日本語スキルを向上させるため、履歴書やビジネスメールの書き方等についての授業を行った。

表２　ビジネスクラスで取り上げた項目

会話（表現・語彙）	ケース・スタディ
自己紹介（社内・社外）、電話を受ける、アポイントを取る、会議に参加する、新規顧客を開拓する、新規顧客とアポイントを取る、商品を売り込む、催促の電話をかける、交渉を進める、受注に成功する	自慢話の自己アピール、休暇の申請、指示の仕方、報告・連絡・相談、残業、接待

※『ロールプレイで学ぶビジネス日本語 グローバル企業でのキャリア構築をめざして』（2012）による。コマ数の都合で、会話（表現・語彙）では全15課のうち12課を取り上げた。上表では課の記載を省く。

②異文化理解能力の育成を目指した日本語学習

ビジネスクラスでは、本プログラムの成果発表の場である修了発表会に向けて、クラス内グループによるプロジェクト活動を行った。プロジェクト活動は、「企業風土と言葉の関係」と「和菓子の復活」（各５名）の２つである。各グループは、(1) テーマの決定、(2) 調査計画書の作成、(3) 調査の実施、(4) プレゼンテーションの学習、(5) 発表のアウトライン作成、(6) ドラフト作成、(7) スクリプト作成、(8) パワーポイントの作成、(9) 発表練習という段階を経て、修了発表に臨んだ。各段階では、教師のみならず、前述の日本人学生が学習者の日本語と活動を支援した。また、これらの調査活動の核となったのは、企業訪問と浅草の日帰り研修である。学習者は、調査計画に基づき、企業訪問[3]や日帰り研修の準備を行った。そして、実際の訪問や研修において、企業風土や地域の特色を観察しつつ、インタビュー

[3] 企業訪問では観光施設運営会社およびキャラクターグッズの企画販売会社を訪問した。

調査を実施した。最後に、その結果を教室で分析、整理した。企業訪問や日帰り旅行を有機的に組み合わせたプロジェクト学習であったといえる。

(3) 学習者の学習成果と感想、今後の課題

学習者のビジネス日本語に対する学習動機が高かったため、授業は概ね順調に進み、修了発表会においてその成果を発表することができた。そして、学習者からは、ビジネス特有の日本語表現をはじめ、履歴書やビジネスメールの書き方といったスキルが学べてよかった、また、企業研修や日帰り旅行がプロジェクト活動に組み込まれており、研修や旅行を楽しむのみならず、授業に有効に結びつけられたという感想を得た。一方、修了発表会の準備では、準備のためのワークシート類を総合クラスと共用しており、ビジネスクラスの活動に合わないことがあったという指摘を受けた。今後は、総合クラスとビジネスクラスの活動をどのように区分し、または融合していくか、接点をどのように創出していくか、プログラムの全体構成や進め方を検討すべきであると考える。

3. 3 午後、週末の活動プログラム

2-1 に述べた通り、本プログラムの特徴は、午前中の日本語授業のみならず、午後や週末の活動やイベントでの広範な体験も的確に学習の中に位置づけていくという点にある。授業および午後や週末の活動全体を概観した上で、これらの整合性を図るのが文化コーディネーター（宮城）の役割である。

午後及び週末の活動は多岐にわたり、複雑であるが、2 種類に大別することができる。第一は、正式な授業の一部と位置付けられる（出欠を取る）活動である。これには、近隣の駅周辺の調査（「ご近所オリエンテーリング」と呼ぶ）、防災館などの公的施設見学などの教室外活動と本学学部生との交流授業、センター教員による日本文化関連授業といった教室内活動がある。第二は、オプショナル（自由参加）の活動である。これには、学部生が企画運営する名所訪問、イベント（たとえば手作りランチ会やスポーツ）参加などと、留学支援団体やサークルが実施する文化体験（例えば華道、浴衣着付けなど）がある（詳細については、末尾の「スケジュール表」を参照されたい）。

活動のうち、主なものを紹介する。まず「ご近所オリエンテーリング」はプログラム中の早い時期に、近隣で日用品の買い物や外食などをしやすくするため、少人数グループで近隣の町を歩き回ってみようという活動である。5 名程度のグループになり、武蔵境北口・南口、三鷹駅北口・南口、調布駅北口・南口、府中

駅北口・南口の8カ所のうち1か所を探索する。この際、複数のタスク（例えば神社仏閣や交番を探すなど）を与えることで、日本人とのコミュニケーションや自国には珍しい「モノ、コト」の発見の機会が得られるようにもなっている。次に「防災館見学」では、本所防災館での防災トレーニングを体験し、期間中に遭遇しかねない大地震、台風、火災といった災害に日本ではどう対応することが望まれているのかを知り、不安を軽減できるような教育効果を狙っている。また荒川教員による歌舞伎入門、菅長教員による俳句入門といった日本文化関連授業があり、それぞれビデオ鑑賞や自作体験もあって、気軽に日本の伝統文化へのアプローチの方法を学ぶことができるようにしてある。

これまでの経験から、この授業活動と自由参加活動の量的、質的バランスが重要であることが分かってきた。つまり午前8時半から11時40分までの日本語授業が毎日あり、学生は午後に通常の座学授業があってもなかなか集中できないため、参加活動型の必修授業を無理のない量だけ設定することが重要なのである。さらに、学生たちは徐々に不安なく、自発的に行動できるようになるので、自由時間の設定も重要である。そこで、自由参加の活動には、学生が自分の判断で興味のあるものに、時間の余裕があるときに、参加できるようにした。

3.4 日本人学生との交流活動

(1) これまでの経緯

毎回のSSプログラムでは、参加留学生とサポーターと呼ばれる本学学生の交流活動がふんだんに行われることが一つの特徴であり、双方の学生からの評価も高い。これまでは、主に本学国際交流サークルTOFSIAのメンバーや学生ボランティア組織などから希望者を募り、午後や週末の活動を企画、実施してもらうのが通例となっていた（藤森・宮城・中村・荒川, 2013: 145）。しかし、このサポーターはほとんどボランティアであり、一人一人の取り組み意欲や姿勢に大きな差があったため、文化コーディネーターとしては、全体を統率して大きな活動につなげることまではしてこなかった。

(2) 授業化への流れ

一方で筆者（宮城）は、多文化共修・国際共修に関心があり、神戸大学留学生センターが主催するKISS（神戸大学学生交流シンポジウム）の合宿や、北海道大学で行われている「多文化交流科目」に関するシンポジウムに参加するなどして、他大学の先進的試みを学んできた。この両大学を含め、いくつかの大学で始まっ

ている共修授業というのは、単に留学生と日本人学生が同じ授業科目を履修するということではなく、同じ場を共有しつつ、互いに交流活動を通じ、多文化的視点を学び合うことを中心課題とするところに特色がある。留学生の割合が高い本学においてですら、「留学生と知り合う機会がない」「4年間一度も留学生と話をしなかった」という日本人学生はこれまで珍しくなかった。それ故に、こうした交流活動を柱とする授業こそ、もっと本学で実施されるべきではないかと筆者は常々考えていた。

SSプログラムの拡大案を話し合う中で、2015年4月からの4学期制移行に伴い、夏学期（7月～9月、SSSPの実施時期）に留学をしない本学学生向けに集中授業を実施できないかという提案がなされた。そこで、(1) に記したこれまでのようなボランティアベースの日本人学生の募集を取りやめ、単位を付与する学部授業、世界教養プログラムの一つとして、「多文化交流実践」という授業（担当教員：宮城）を設置することになった[4]。

(3) 授業の概要

履修した本学学生数は23名であった。SSSP開始となるまでの準備として、5月から7月最初までに3回のミーティングを開いたが、この授業は夏学期授業であるため、正式に登録者が決定するのは7月初旬であったし、事前ミーティングにはなかなか全員揃うことはなかった。筆者は、SSSPの概要と昨年までの交流イベントなどの紹介は行ったが、できるだけ具体的活動内容を指示したり、グループ分けを強制したりせず、履修学生の自主的な判断に委ねた。幸いリーダー役が決まり、①日常生活のサポートを中心にするグループ、②日本語授業でのサポートを中心にするグループ、③平日の午後のイベントを企画、実施するグループ、④週末のイベントを企画、実施するグループに分かれて、それぞれ準備をすることになった。

学生の学年は1年生が多かったが、2・3年生もおり、専攻語も多様で、ここで初めて知り合った者も多く、月1回のミーティングも進行が遅く、統一感も得にくかった。教師を含む正式な連絡には、TUFS Moodleと学務情報システムを用いたが、学生間のやり取りには、FacebookやLineが頻繁に用いられたようである。

---

[4] SSWPの実施時期は、冬学期の授業時期とずれているため、同様の授業は設定できない。そこで、秋学期に「オセアニア地域基礎」を履修している学生が「アクティブラーニング」2回分を交流活動に充てることになっている。

(4) 成果

グループ①は、待機する場所が決められているわけでもなく、さほどニーズがなかったため、別のグループの活動を手伝うことが多かったようである。日帰り研修にも参加してくれた学生もおり、担当教員にはありがたい存在であった。グループ②は日本語授業中だけでなく、午後の発表会準備でも多くを期待され、多忙だったようだが、その分、達成感も高かったようである。担当教員としても、頼りになる存在であった。グループ③と④はそれぞれ、数多くの交流イベントを企画してくれた。その例としては、クッキング体験、ピクニック、日本の伝統的遊びの体験、東京ツアー、深大寺見学、みなとみらい探訪、外食（お好み焼き、焼き肉）、江戸東京博物館・隅田川花火鑑賞、日光日帰りツアー、ディズニーシーツアーなどである。猛暑の中、体調を崩す学生もいたが、実に精力的に企画、実施を行ってくれ、留学生との交流もかなり進んだ様子であった。

日本人学生には、最後にアンケート回答と期末レポートの提出を求めた。アンケート回答では、18名中17名が、「来年度履修を考えている学生に勧めたい」と答え、本授業に対する満足度が非常に高いことが示された。また期末レポートにおいても、通常の授業時間（90分×15回）では到底収まらない時間をかけて関わったSSプログラムに対する思いがひしひしと伝わってくる記述が多かった。うまくいった点、いかなかった点、自分が成長した点、来年度参加する学生へのアドバイス、担当教員への意見など、きちんと成果を示した真面目なレポートが多く、教員間で回覧し、プログラム振り返りの材料とした。

4. 成果と課題

サマープログラムを本格的に実施したのは今回が初めてだったこと、並行して日本人サポーターの交流活動を授業化して、このプログラムに組み込んだことなどを考えれば、全体として成功であったと自負している。しかし、反省点もある。その中でも、特記しておくべきことは、修了できない学生が6名出たことである。その理由は様々だが、その背景には次のようなことがある。

(1) 想定していた日本語能力レベル（初級後半）に達していない学生が複数名おり、クラス授業及び午後の活動への参加が難しくなったこと
(2) 国内外の一部の機関で実施されている観光＋語学研修的なイメージで参加した学生がおり、観光を優先して、授業に来なくなってしまったこと
(3) キャンパス外のホテルに宿泊している学生に無断欠席が続いた者が出たこと

これらについては、今後、事前に提出させる日本語能力に関する情報をより正確なものにする、日本語能力レベルの判定を厳しくする、などを考えたい（現時点では、短期間のプログラムでもあり、ゼロ初級者の受け入れは想定していない）。

5. まとめ・今後の方向性

SSプログラムは、「短期間の試行的日本語・日本文化学習体験」という側面のみならず、参加した学生が近い将来、本学や別の日本の大学の中・長期留学に踏み出そうと考えるような行動レベルの変化までを期待している。つまり、学部や大学院への交換留学や一般留学につながる重要な窓口としての役割が期待されているのである。実際に、何人かのSS参加体験者が、本学あるいは他大学の学部、大学院への留学に踏み切っている。また、このプログラムに関わった日本人学生が、提携校を含む海外の大学に積極的に留学したり、ここで知り合った留学生を海外まで訪ねたりしていることが留学生課から報告されており、本学学生の行動にも少なからず影響を与えていることがうかがえる。このような有意義なプログラムをより充実させるとともに、しっかりと広報していきたい。

SSプログラムは、夏3週間、冬4週間のスポット的教育活動という認識がなされがちのようだが、実際には、広報活動、次のプログラムの準備、募集、選抜、終了したプログラムの報告書作成など、年間を通じて休みなく活動が行われている。SSプログラムでは毎回のことであるが、参加学生も担当教員も期間中はとにかく走り続け、疲労感も感じるが、終わると一気に弾むような達成感を味わう。今回は猛暑の中のプログラムということもあり、まさにその思いが強かった。

ここに1枚の写真がある。SSSP2015閉講式後のフェアウェルパーティーでの最後の集合写真である。一人一人の表情から、プログラムに対する思いが表れている、というのは大袈裟であろうか。

資料１：SSSP2015 スケジュール表最終版

		8:30–10:00	10:10–11:40	11:40–12:40 昼休み	12:40–14:10	14:20–15:50
2015/7/9	木	入寮日				
2015/7/10	金	10:00– 開講式、全体オリエンテーション＠さくらホール 11:00ーコンピューターオリエンテーション＠研究講義棟217 12:00–13:00プログラム・オリエンテーション＠研究講義棟217 13:00–14:00ウエルカム・ランチ＠大学会館 14:00–キャンパス・ツアー 15:00–事務オリエンテーション＠研究講義棟219				
2015/7/11	土	休日				
2015/7/12	日	休日				
2015/7/13	月	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		防災館見学	東京スカイツリー見学（有料）
2015/7/14	火	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		個別指導（宮城・金子・寅丸）	華道・茶道 （13:00–16:30）
2015/7/15	水	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206	外大生交流授業＠さくらホール,103,107,303		
2015/7/16	木	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206	囲碁教室	歌舞伎（荒川先生）＠103	歌舞伎（荒川先生）＠103
2015/7/17	金	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		オリエンテーリング（近隣の町）	書道（16:00–18:00）
2015/7/18	土	休日				
2015/7/19	日	休日				
2015/7/20	月	祝日				
2015/7/21	火	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		個別指導	スポーツ（外大生主催）
2015/7/22	水	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206	外大生交流授業＠103,107,303		
2015/7/23	木	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206	囲碁教室	俳句（菅長先生）＠103	ゆかた着付け体験
2015/7/24	金	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		俳句（菅長先生）＠103	日帰り研修オリエンテーション（14:20–14:50） 書道(14:50–18:00)
2015/7/25	土	総合日本語＆ビジネス日本語 ： 日帰り研修				
2015/7/26	日	休日				
2015/7/27	月	総合日本語：日本文化体験研修 ／ビジネス日本語：企業訪問				
2015/7/28	火	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		深大寺＆そば（外大生主催）	
2015/7/29	水	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206		外大生交流授業＠103,107,303	
2015/7/30	木	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206	囲碁教室	個別指導（宮城・金子・寅丸）	ゆかた着付け体験
2015/7/31	金	日本語@202,203,204,205,206	日本語@202,203,204,205,206			書道（16:00–18:00）
2015/8/1	土	休日				
2015/8/2	日	休日				
2015/8/3	月	修了発表会 ＠さくらホール			アンケート＠研究講義棟217	
2015/8/4	火	10:00–10:30 閉講式＠さくらホール フェアウェル・パーティー＠大学会館				
2015/8/5	水	退寮日				

囲碁・華道・茶道・書道・着付け体験・東京スカイツリー見学・外大生主催イベントは参加自由です。時間等の変更や場所の詳細は掲示板でお知らせします。

宿泊先：	東京外国語大学国際交流会館	〒183–8534	東京都府中市朝日町3–11–1	(042)330–5185
	調布アーバンホテル	〒182–0036	東京都調布市飛田給1–1–25	(042)486–9321
	府中アーバンホテル	〒183–0055	東京都府中市府中町2–1–9	(042)366–7777

使用テスト（プレースメント用）

J-CAT 日本語テスト　http://www.j-cat.org/

使用教材

安藤節子・佐々木薫・赤木浩文・田口典子・鈴木孝恵（2009）『トピックによる日本語総合演習　中級後期』スリーエーネットワーク

安藤節子・佐々木薫・赤木浩文・坂本まり子・田口典子（2010）『トピックによる日本語総合演習　上級』スリーエーネットワーク

国際交流基金関西国際センター（2008）『日本語ドキドキ体験交流活動集』凡人社

佐々木薫・赤木浩文・安藤節子・草野宗子・田口典子（2012）『トピックによる日本語総合演習　中級前期』スリーエーネットワーク

平井悦子・三輪さち子（2004）『中級へ行こう』スリーエーネットワーク

村野節子・山辺真理子・向山陽子（2012）『ロールプレイで学ぶビジネス日本語 グローバル企業でのキャリア構築をめざして』スリーエーネットワーク

引用文献

藤森弘子・宮城徹・中村彰・荒川洋平（2013）「異文化体験型シラバスに基づいたショートステイプログラム 2012 の実践と課題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39,137-152.

Development of Short-term Study in Japan Program at JLC-TUFS:
In case of Summer Program 2015

MIYAGI Toru, TORAMARU Masumi, KANEKO Hiroko

There has been further development of "Short-term Study in Japan Program: Summer Session and Winter Session" at Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies (JLC-TUFS) since the original Winter Session program (SSWP) started in 2012. This paper explains an outline of Summer Program (SSSP) 2015 with some new contents: In this program, (1) a business Japanese class was formally introduced along with general Japanese classes at four levels; (2) various kinds of events/activities were prepared during the afternoon and weekends either outside or inside of the university campus not only as official activities by JLC-TUFS, but also as unofficial (optional) activities by Japanese student supporters; (3) a formal class for Japanese students who support learning activities of SSSP was arranged and conducted for the first time as an undergraduate level subject in the summer semester parallel to SSSP; and (4) TUFS Moodle (an open-source e-learning management system) was introduced to enhance the students' reflective learning as well as cooperative learning, and to facilitate communication between the students and the teaching staff members of both JLC-TUFS and other partner universities which sent the students to TUFS. The authors also point out successful outcomes with glowing reviews by the participants and some pending issues including incompletion of the program by some students.